

表2：リフォーム補助金の推移（H23～H28）

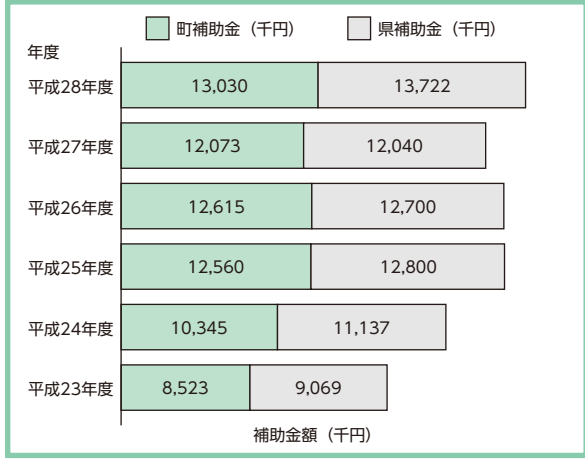
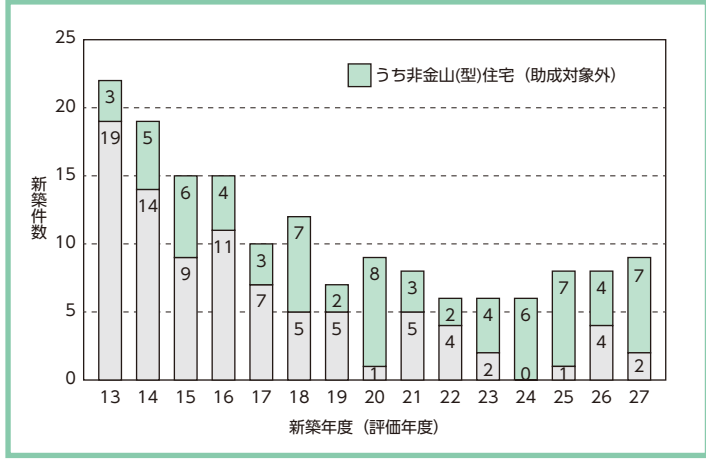


表1：過去15年間における「金山(型)住宅」の建築傾向



成13年度）から年々減少しつつもしばらく平均8戸／年を保っていたが、6年前の平成23年以降1・8戸／年に急減している。一方、その間非金山住宅は平均4・6戸／年と変わらない。結局、新築住宅総数の減少は金山（型）住宅の減少である。この状況がこの先も続くかは分からない。が、これからは金山住宅が少くない軒数で推移することとは、残念ながら変わらないだろう。

——住宅建築コンクールのこれから——

近年、金山町の全国評価は高い。「金山町街並み景観づくり100年運動」が一貫して継続的に行われてきた成果に違いないが、その一方で世代交代を含めて100年運動が、曲がり角にきていることも確かである。

ところで、これまでの「金山町街並み景観づくり100年運動」を支えてきた柱は何だろうか。それはこの「住宅建築コンクール」と「風景と調和する街並み景観条例」の実施である。この二つの施策の柱が、これまでの40年あまり運動を下支えてきたのである。今、その仕組みの継続が難しくなりそうなる兆しが見えている。応募軒数の減少、金山住宅の非採用の増加は、仕組みにとって深刻な事態である。

果たして、これまでの延長線上で進めていけばよいか否か判断が難しい

が、ここはあせらず対策を講じていくのが現実的な選択ではないだろうか。まず平成29年度前半をその検討期間に当てたらどうかと思われる。

またその時の一案として、近年高い水準で実施されているリフォーム事業の成果を、住宅建築コンクールに加えたらと思われる。住宅リフォームの要望は、見方を変えれば、工夫しながら町に住み続けていくという町民の宣言である。人口減少の今、その宣言は貴重である。毎年80件前後の申請件数で推移している住宅リフォーム工事は、大工職人の年間業務量に占める割合も大きく、地域経済循環の役割も担っている。

——施策を見直す契機に——

これまでのリフォーム事業と、町が進めてきた「街並み景観づくり100年運動」を受けての様々な施策、両者の整合性を図ることはできないだろうか。どういったケースを評価し、表彰するのがよいかなど様々な検討が必要だろう。けれどもこれだけ盛んなリフォーム事業で行われる工事には、町民の暮らしの切実な反映や、大工職人・工務店の技術的な工夫が見られるに違いない。コンクールによる成果の公表・評価は、町民および工務店相互に新たな刺激を生み、地域の活性化につながる

るのではないかと期待される。

今年度住宅建築コンクールの応募数は1軒と少なかったが、逆に施策を見直す契機を与えてくれた。「金山街並み景観づくり100年運動」にこだわって、続けていく。そして金山住宅で建てるメリットを訴えていく。そのため知恵と方法を出し合うチャンスである。これから町民・行政・専門家が協力して、直面する曲がり角を越えていくのではないか。



左：日輪舎
住宅建築コンクール審査日には町登録文化財の日輪舎を見学。神室修練農場の教室兼寄宿舎として昭和18年に建設。平成28年2月に建物としては初の町指定登録文化財となった。



金山町住宅建築コンクールのこれから ——平成28年度のコンクールを振り返って——



金山町住宅建築コンクール審査委員長
金山町街並み景観審議会専門委員

片山 和俊 氏

——審査は例年通りに進めた——

応募は1軒であったが、審査員とオプザーバー全員で現地審査を行い、各自の講評に基づいた話し合いによって受賞を決定した。矢口初男郎（建築柴田施工）は、切妻屋根の木造2階建てで、1階に居間・食堂と続き間の茶の間・客間8帖があり、引戸で仕切り、使われている。2階は寝室、洋室3室の構成だが、そのうち2室間は建具で区切り広く使えるようにし、収納スペースも十分にとられている。居間コーナーにはスチール製新ストープを置き、階段脇の煙突で2階廊下を温め、小さな物干コーナーとして使っている。雨や雪の時に便利な工夫である。車庫外壁の一部を白壁・下見板張りとし、母屋との一体感を図った心遣いも良い。全体としてコンパクトな平面構成に、大家族の暮らしがよくまとめられ、好感がもてる。

——審査の要点はおおよそ3点——

1点目は「風景と調和した街並み景観条例」に見合う金山住宅らしい建築的構成、主に外観。2点目は暮らしに对应した住まいで、加えて金山杉をはじめ、木の香りを生かした設え、主に内部の構成。3点目は周囲の自然や街並み環境を内外部に生かしているかである。1点目の金山住宅であること、2点目の8人という大家族居住をさばいた平面計画や、木の温もりのある内部の設えは全体に好評であった。3点目については、居間を南向きにして裏側の緑に開くようにすれば更によくなったのではないかという意見が専門委員から出された。

現地審査時に委員大勢が詰めかけたにも係らず、施主・施工者の温かい出迎へと説明を受けた。その印象から、この家が設計から建設まで、丁寧に目つと気遣うに行われたことが伺い知れた。

た。そして大家族が賑やかに暮らしている様子を想像し、心温まるものを感じた。矢口邸はしみじみとした良い作品、仕事である。佳作が相応しいと考え贈ることに決定した。

——これまでの住宅建築コンクール——

住宅建築コンクールは今年度で39回目を迎えた。思い返してみるとここ数年新築が減り2・3軒ということが多かった。今回1軒しか応募がなかったのは残念だが、住宅建築コンクールの応募動向を町資料（参照：表1過去15年間における「金山（型）住宅」の建築傾向）で振り返ってみると、かなり前に読み取れる傾向であった。

平成13～18年度間に戻ると、新築住宅数は平均15・5戸／年と多い。が、その後の平成19年～今年度の9年間に7・4戸／年に半減している。さらに助成対象の金山住宅となると、平成13～22年度の10年間は、当初の19戸（平

「金山街並み景観づくり100年運動」を支えてきた柱は何か。それは「住宅建築コンクール」と「風景と調和する街並み景観条例」。今、その仕組みの継続が難しくなりそうなる兆しが見えている。それでも街並みにこだわり続けていく意味と方法とは――。